

第1問 ヨーロッパ中世の宗教上の変動(計 22 点)

[テーマ]5～7世紀のヨーロッパ、西アジア、インドにおける宗教上の変動。

[解答上留意したい点]①旧宗教のその後の動向にも言及する。

②政治権力との関連で述べる。

[加点ポイント]※論点となる国別にポイントを設けた。

◆西ヨーロッパ

- (1)アリウス派のゲルマン諸王国の崩壊。(1点)
- (2)こうした中で、5世紀末(496年)に、フランク王国を建国したクローヴィスが正統アタナシウス派に改宗。(2点)
- (3)フランク王国はローマ教会と提携して発展の基礎を築く。(1点)
- (4)一方、ローマ教会もベネディクト修道会を通してゲルマン布教を行う。(1点)
- (5)(3)(4)から、西欧キリスト教世界成立の基盤が形成。(2点)

◆東ヨーロッパ

- (1)ビザンツ帝国では、ユスティニアヌス帝時代に、皇帝がギリシア正教会の首長を兼ねる皇帝教皇主義が確立。(2点)
- (2)スラヴ人やイスラーム勢力の進出の中で、ビザンツ帝国はスラヴ伝道を進める。(1点)
- (3)(2)により、でギリシア正教世界が拡大。(1点)
- (4)一方でイスラーム教に対抗して、ビザンツ帝国は、726年に聖像禁止令を出し、これによって東西教会が分裂。(2点)

◆西アジア

- (1)ゾロアスター教がササン朝の国教となり、民間のマニ教は異端として弾圧。(2点)
- (2)7世紀にイスラーム勢力がササン朝を滅ぼすと、中央アジアまでイスラーム化が進む。(2点)
- (3)キリスト教・ユダヤ教等は啓典の民として信仰を認められる。(1点)

◆インド

- (1)グプタ朝下で、バラモン教と民間信仰が結びついたヒンドゥー教が民間に普及。(2点)
- (2)一方、仏教は教学化して民衆から遊離。(1点)
- (3)7世紀のハルシャ=ヴァルダナの保護下の繁栄を最後に、以後仏教は急速に衰退。(1点)